きびのさと

NO.118 月刊

昭和四十三年四月一日 発行（非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一三五字垣方時雨三之三
吉備観光協会

第三輯 寺院篇 第廿八号

○八幡大菩薩（その二）

古鏡は六世紀頃にすでに鏡作部という氏族があつてその製法を習得し我国でもさかんに鋳造され出したのである神鏡はその意味から神社には円鏡に台座をつくつて神殿に置き、いつき奉る御神体を表現するようになつた

二、灯篭 一対（拝殿と本殿の間の左右にある）
奉納米寿記念 昭和拾年正月吉日 高木 柳

三、灯篭 一対 本殿前の左右にあり）
奉献 太田俊三郎 昭和六年一月建之

△神鏡 一直径二四糎）
明治三十七年甲辰一月再調 八軸大士 氏子中
神鏡の柄の銘に「二八七 高木中ノ年女」とある。

△瑞籠は高さ百糎にして支柱毎に九の寄進者の氏名が刻まれている。
奉納 河村丑年女 岡本軍一 太田辰三郎
小野輝夫 本町部内信徒中 西観音堂信徒中
則武栄蔵 太田敏夫

一二

熊代仁左エ門 太田多三郎 国富浦造 野崎友吉
草野慶三 太田昌治 栄町戎町宵宮信徒中 野上淑夫
野崎幹雄 則武年二郎 兼松浜蔵 野崎武吉
安井勝太郎 太田錦五郎 三宅保次郎 野崎増三郎
熊代栄五郎 林勝次郎 高木宗次郎 野崎清三郎
宇屋定治郎 安井鐵五郎 岡本源治郎 中尾源平
安原又五郎 安井虎之進 森安康二 黒瀬虎吉
中田信徒中 林竹造 山崎徳太郎 松本道造
高塚弥三郎 安井五百造 岡崎豊三郎 西尾田信徒中
高塚久次郎 安井牛次郎 太田誠之 東光田信徒中
森安繁太 安井柳三郎 矢尾寿吉 当町本家高木中女
人見良一 西村新三 野崎常吉 真野安太郎
午之年男 安井惣太郎 林彦次郎 片山守夫
岡崎初治 安井九平 国富清三郎 吉田金作
田中楠七 安井熊 野崎源之助 永井伊三郎
片山政治 草野末吉 岡崎孝兵衛 国富三喜次
糟谷三郎 安井米太郎 安井常太郎
太田俊三郎 西牧太郎 東平野信徒中 安井京一
三宅常次郎

吉田佐之助
野崎官治
郡安行七
雉波庄次
難波宝大郎
支之年男

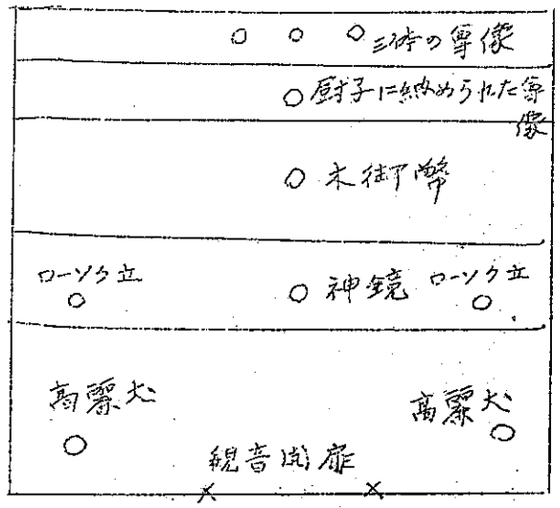
一 本社拝殿建築寄
附連名

一金三百二拾五円
積立金氏子中
一金百三拾円 高木久太郎
一金壱百円 内田慶太郎
一金八拾円 太田俊三郎
一金六拾円 安井 熊
一金六拾円 安井常太郎
一金五拾円 太田五郎吉
一金五拾円 藤田熊太郎
一金三拾二円 高木宗太郎
一金三拾円 永井竹三郎
一金三拾円 野崎廣太
一金三拾円 三宅要造
一金二拾七円 太田鉄五郎
一金二拾五円 太田敏夫
一金二拾五円 吉田佐之助
一金二拾五円 野崎官治
一金二拾一円 太田久七
一金二拾一円 野崎一十郎
一金二拾一円 森安繁太
一金二拾一円 野崎常吉
一金拾七円 田和富十郎
一金拾七円 安井甚四郎
一金拾六円 林 勝次郎
一金拾六円 田中猪七
一金拾六円 森 巳之助
一金拾三円 永井伊三郎
一金拾三円 野崎増三郎
一金拾二円 野崎信雄
一金拾二円 野崎武吉
一金拾二円 野上金吉
一金拾二円 野崎友吉
一金拾二円 国富清次郎
一金拾二円 安井五百吉
一金拾二円 安井辰三郎
一金拾二円 安井源次郎
一金壱百参拾円 氏子中
一金八円 森 勝次郎
一金八円 吉田金作
一金七円 吉田佐之助
一金七円 江本（不明）
一金五円 千原（不明）

大正四年五月建之
書之 西村孝番
太田（不明）

△ 刻文 木村栄次郎

本殿内部の配置



寄進者中の高木久太郎は本町の富豪醤油譲造業を営む川野屋の主人である。久太郎は大正七年一月八日七十四才で死去した。妻は阿部といい嘉永元年（甲申）阿曽村金屋の旧家鋳物師林氏の出である高木家に嫁いでから深く八幡大菩薩を信仰し明治三十七年五月七才の時に神鏡を寄進し、更に昭和十年には八十八才の米寿の祝に社前に石灯籠を奉納した。長命して昭和十四年九十二才で他界したが子に恵まれて三男二女をもうけた。長男広三郎が家督を継ぎ次男西安次郎は旧庭瀬藩家老渡辺家を相続した。しかし広三郎は大正十一年三月十八日五十七才で病没し不幸にして子がなかった。そこで要次郎の義の清が跡目相続したが幼少であったので箕衆せず、要次郎の言に従うて川野屋の暖簾をいまの波野芳夫に譲って東京へ移住したのである。丹田慶太郎は中田の出身にして又を富吉といい弘化二年十二月三日の生れである。明治廿年一月四十三才の時に誤って罪を犯し国国の身となったが改悛して仏門に入り五年間に亘り信城寺の兄子母神を信仰し日蓮上人について修行を積み上京して神奈川県逗子町の法性寺の住職となり日蓮上人という。大正四年五月七日七十才で示寂した。本社の建築と日蓮上人の孔とは同じ月で

心ある故人が生前に俗名によって寄附金を送ったのであろう。上人の墓は信城寺の山門を入った左側にある。これは東都の信者が上人の徳を慕って昭和三十九年五月五十年忌に建てたものである。法諱を朗慶院日亜聖人という。

太田俊三郎は西観音堂六八七番地に住する現在太田俊子の祖父にして大正四年の本社建築には高木久太郎、内田慶太郎と共に助力し基本を寄進し大いに盡力した信者である。俊三郎は孫平の子で昭和七年五月七日九十才の長寿を保つて他界した。俊三郎には友七、徳造、嘉三郎、静野、昌治の五人の子があったが長男友七は明治三十六年六月九日廿三才の若きで病死したので二男の徳造が家督を継ぎ他は分家して一家を立した。徳造も亦大正五年八月廿一日三十三才でこの世を去り一人娘の俊子に養子して四人の女子をもうけたが、この養子安男も昭和二十九年五月五日四十四才で急死した。

△本殿と幣殿を結ぶ左側の一枚石に刻んである氏名

発起者 河村口燈　東野安太郎　渡辺康男　高塚孫三郎
担当 太田俊三郎　西村孝香　吉田佐之助　野崎官治
安井鉄五郎　吉田久右エ門　野崎常吉
会計 太田敏夫　太田卯三郎　高木宗三郎　則武栄蔵
藤田能太郎　岡本源吉　田中猪七　草野慶三

黒瓦葺代治　△当山に保存の棟札に
安井鉄五郎　大正四年五月十日本社上棟
安原栄吉　世話人　安井金二郎
阿部六郎　太田俊三郎
三宅要造
森栄三郎　棟梁香川県仲多度郡本島村
勲八等　物部和平
川田文之助　彫刻師都窪郡琴江村有城
藤原定太郎康光

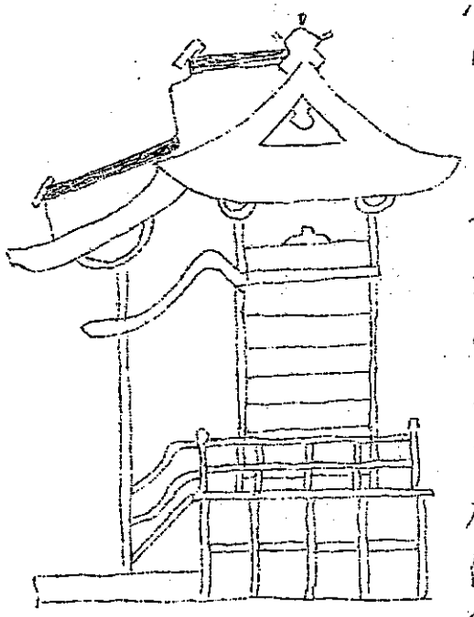
以下省略

△石造線香立　四立四四糎　厚サ二十五糎
「明治五壬申四月吉日氏子信者中世話人
田本屋忠八
花亀屋兼吉
大黒屋忠兵衛」
人工石造りにて年代不詳

石灯籠　一対「太田辰三郎」
手水鉢「奉寄進　願主　川野屋」（高木久太郎）
石華表「奉献　太田俊三郎　石工野村嘉一郎」

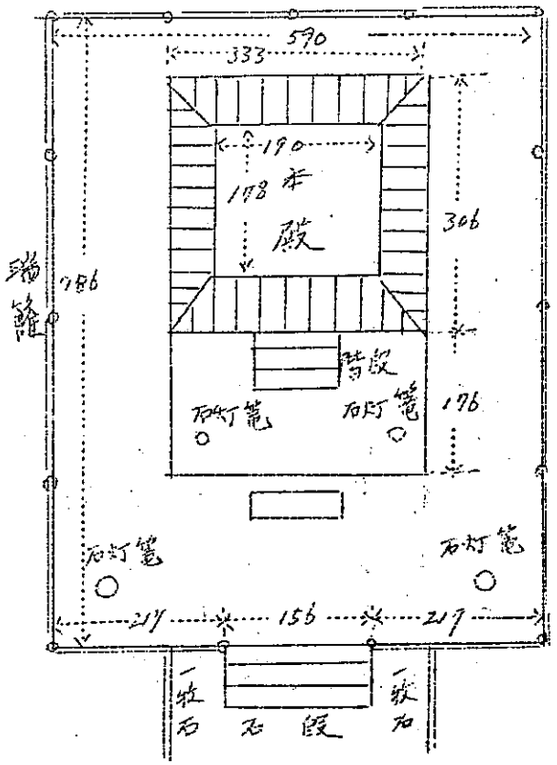
△八幡神を僧形の神像に造くられた有名なのは奈良東大寺勧進所八幡殿の本尊である。この本尊は大仏造営に つ

くした九州の宇佐氏が信仰していた八幡神で古紀七八一年に菩薩号が贈られ護国の神となった。もと東大寺の鎮守社手向山八幡宮の御神体であったものでこれは俊乗坊重源上人が佛師快慶をして造らした代表作である。朱の色座、黄衣、赤や緑の色彩のよくのこった遠山模様の袈裟などはなやかな色彩が明るく、右手に六輪の錫杖を持った美しい姿である。これは華麗な男盛りの比丘の姿である八幡神像である。八幡神は俗に八百萬神々のなかでも特に人々に親まれ昔の人は南無八幡大菩薩と呼ばれ主神應神天皇を神佛混淆によってこのような僧形に想像したのであろう。



本殿 側面（南側）

本殿平面図（西向）



○大橋の妙見堂（その二）

「祭札之図の額縁には

「元治元年　願主　戸川主馬助達敏」。とある。

これは当時の摂州領主戸川氏が開基に際して寄進したものである。

この額面はもと堂の東側に六畳敷の庵室があってここに懸げられて永い間の煙塵で傷められていたので建物を取り毀してしまった

堂は他へ移轉してしまった。最近足守川拡張改修工事のため御

北辰妙見大菩薩というは摂津国豊能郡地蔵寺にある日蓮宗真如寺の御本尊である。昔多田満仲の後裔摂津源氏の能勢摂津守頼次が創建し身延山の廿一世の日乾上人を招じ

て開基せしめた。頼次は日蓮宗を深く信仰し、年間に領内の真言宗を悉く同宗に改めさせ鎮守の霊符を北辰妙見大菩薩と稱へ上人が自ら彫刻した霊像を安置して本尊としたのである。これより多くの信仰者が集まり分霊を乞うようになった。真如寺から一里余いった所に能勢の妙見がある。この妙見は多田満仲の三代の嫡孫能勢頼国が三條天皇の長元年中に満仲の鎮守佛であった妙見菩薩を祭祀したことに創まり頼次が北辰妙見と同じく日乾上人から開運妙見大士の尊号を賜ってから広く信仰するものが増加してきた。吉備地方でも能勢の妙見まいりといって毎年四正月には多数の団体まいりがある。

一

地蔵堂

定城の足守川、小橋の西詰にある。堂は奥行三間、間口二間の瓦葺屋根である。部落の公会堂に兼用している。本尊は石地蔵尊にして二段の台石の上に丈三尺の立像を安置している。

台石の上段正面に「法界」、右面に「為一漚童子」「宝暦七丁丑年八月十一日」、左面に「施主雑波（以下不明）」の銘が刻まれている。本尊の前には石造花筒岩の花筒と線香立がある。その銘に

「奉寄進　平川重平　荒木亀造　岩畑甚吉　荒木助造
明治十二年七月吉日建之」。とある。

思うに一漚童子の漚の文字は水に浸すという義に解せられるので、昔難波某という人の幼児がこの附近の川辺で溺死したので菩提を弔うためにここに露石佛を建てたものであろう。堂の前に一地神」と刻んだ一本の石碑がある。これも足守川改修で他に移轉した。（おわり）　末完

理　庭瀬駅前通り
修
自転車
オートバイ
販売
高山自転車商会
吉備局電二二八番

モーサン
吉備町庭瀬国道筋
ヒラマツ
吉備建材
電話（吉備）二三七・有線七〇一